

国内外で約3万6千人が挑戦、 総受検者数100万人を突破！

2019年度第2回日本語検定



日本語の総合的な能力を測る「日本語検定」（略称・語検、文部科学省後援事業）の2019年度第2回（通算第26回）検定試験が11月8、9日に行われました。国内は47都道府県83カ所の一般会場と、学校や会社の施設を利用した602カ所の準会場で、海外はアメリカ（3カ所）、イタリア、フランス、ドイツ、韓国の計5カ国7カ所で実施。国内外を合わせた受検者数は35,936人で最年長は90歳の女性。最年少は5歳の男の子でした。

今回の検定試験で、第1回からの総受検者数が100万人を突破しました。

「語検」は「敬語」「文法」「語彙（ごい）」「言葉の意味」「表記」「漢字」の6つの領域にわたり、日本語を正しく使えるかどうかを測るものです。難易度に応じて1級から7級に分かれており、幅広い年齢層がそれぞれの級の認定の取得に挑戦できます。

◆ 東京会場では601人が受検

東京の一般会場は上智大学四谷キャンパス（千代田区紀尾井町）で、午前11時から2、4、6級、午後1時半から1、3、5、7級の検定が行われました。この日は、ところどころに青空がのぞく薄曇りの天気、大学のある千代田区の午前10時の気温は15度と、やや肌寒く感じる空もよう。受検者のみなさんは、試験会場の入り口で受検票を取り出して自分の番号を確かめ、それぞれの試験室に足早に向かっていました。



「大学の先生に勧められて」

杉並区に住む大学1年生の男性は初めての受検で2級を受けていました。大学の先生に勧められたそうで、その先生の「文章表現」の講義では、日本語検定で3級以上に通ると成績に加点してくれるのだということです。「検定のための勉強は、過去問をやりました。2級の検定も、実力を出すことができればなんとかなるのでは」と、自信をのぞかせていました。

「すてきな言葉を使いたい」

板橋区在住で今回初めて4級を受けるという女性は70歳だそうです。以前、通信教育の生涯学習講座で日本語を学んだことがあったものの、身についたという実感があまりなかったので、今回、日本語検定に挑戦することにしたとのこと。「時候のあいさつとか、日本語には情緒のあるすてきなことばがたくさんありますよね。日本人なのに、あまり知らないのです。手紙なんかで、そんな日本語を使えるようになればと思い、受けることにしました」と話してくれました。



「小4、中1の兄弟で受検」

6級の試験室の前の廊下では、小学校4年生の男の子が付き添いの父親と話していました。この日の午後には中学校1年生の兄が母親の付き添いで5級を受ける予定で、兄弟そろってのダブル受検です。お父さんは「学校の勉強にも役立つだろうから、受検させることにしました」と話していました。

「入社予定の会社で必須」

世田谷区在住の大学4年生で、来春、食品メーカーへの就職が決まっているという男性は、入社する会社が日本語検定の受検を昇格の必須要件の一つにしているため、入社前に受けてしまおうと思ったそうです。この日は午前中に2級、午後に3級を同時受検。「対策は公式テキストをひたすらやりました。あと単語帳などですね」と、使い込んだ教材をめくりながら最後のチェックをしていました。

「台湾国籍の歯科医学生も」

台湾出身で29歳だという男性は、日本の大学院で矯正歯科を学んでいるそうです。今回初めての受検で2級を選択。来日4年目で、台湾でも学んでいたという日本語の会話はとても滑らか。「大学院を出たあとは台湾に戻って歯科医になる予定ですが、自分の日本語能力をさらに高めたいと思い受検しました」と動機を話してくれました。日本語の勉強は、テキストで学ぶほか、ラジオやテレビ、ウェブなども語学学習の観点から意識的に利用しているという話でした。

(時事通信社編集部 伊豆倉 哲)



**次回
予定**

文部科学省後援事業 **日本語検定**

2020年度 第1回 (通算第27回)

一般会場 **6/13(土)** 準会場 **6/12(金)・6/13(土)**

申込期間 3/2(月) ~ 5/15(金)